

各地で話題の病害虫

ミカントゲコナジラミ

学名： *Aleurocanthus spiniferus* (Quaintance, 1903)
英名： Orange spiny whitefly

2007年2月に三重県において、チャの旧葉に寄生しているミカントゲコナジラミの幼虫が確認された。本種は古くからカンキツ類の害虫として知られていたが、2004年に京都府、2006年に滋賀県、奈良県でチャへの寄生が確認されている。被害は成虫・幼虫による葉の吸汁加害と、幼虫・蛹の分泌物により夏以降にすす病を併発する。中国、台湾の一部地域ではチャの重要害虫の一つとされており、中国では、多発した場合に萌芽停止、樹勢衰弱、大量落葉などの被害が報告されている。



成虫 上:被害葉(すす病) 下:卵・幼虫・蛹

雌成虫の体長は約1.3mmで、雄は雌よりやや小さい。前翅は紫褐色で不整形の白紋があり、体表面が白粉で覆われている。卵は長さ約0.2mmの黄色い曲玉状で短い柄がある。ふ化幼虫は淡黄色で葉に定着すると光沢のある黒色の小判型となり、3齢を経て蛹になる。幼虫及び蛹殻の背面は棘状の刺毛を林立し体周は白い口質物で縁取られている。チャでの発生は年4回と考えられており、成虫の寿命は約4日と短く、新葉の葉裏に産卵することが多い。ふ化幼虫は分散せず群生する。

本種の卵・若齢幼虫は微小で、葉裏に産卵・寄生するため発見が遅れ、成虫やすす病が発生するまで気づかないことが多い。また、放任茶園は本種の発生源になる可能性が高い。このため、定期的な茶園の観察や放任茶園の適正管理が重要である。耕種的防除としては、茶園の風通しを良くし、卵・幼虫・蛹の寄生葉の除去に努める。薬剤防除を行う場合は、若齢幼虫発生期にブプロフェジン水和剤またはトルフェンピラド乳剤を散布する。また、本種为天敵として寄生蜂など数種が知られている。

写真提供：奈良県病害虫防除所
：滋賀県農業技術振興センター茶業指導所 竹若氏

キュウリ黒点根腐病(仮称)

病原菌： *Monosporascus cannonballus* Pollack & Uecker
英名： *Monosporascus* root rot

2006年8月、岩手県の自根栽培の露地キュウリほ場において、地上部が萎ちょうし根部が褐変腐敗する症状が発生した。被害株の根には小黒点状の子のう殻が多数形成され、これを顕微鏡観察したところ、子のう殻中に多数の子のう胞子が確認された。岩手県農業研究センターの診断の結果、本症状は *Monosporascus cannonballus* によるキュウリ黒点根腐病(仮称)であると同定された。本病原菌によるメロン、スイカ等の黒点根腐病が各地で確認されているが、これまで国内におけるキュウリでの発生報告はない。



地上部の萎ちょう症状 上:根に形成された子のう殻(小黒点)
下:子のう殻と子のう胞子

症状は、収穫期を迎えた頃から地上部がしおれ始め、発病初期には晴天の日中に萎ちょうし朝夕や曇雨天には回復する。これを繰り返した後、急激に枯れ上がる。根では、初め細根が腐敗脱落し、残った根はアメ色に腐敗する。症状が進むと根上に直径0.3mm程度の小黒点(子のう殻)が形成され、これが診断に際しての重要なポイントとなる。

本病原菌は被害植物の根部残渣とともに土壌中に長期間生存するため、被害株は早期に抜き取り適切に処分する等の耕種的防除に努めるとともに、管理作業等を通じて土壌を未発生ほ場に持ち込まないことが重要である。なお、メロンやスイカではウリ科作物の連作を避けることや、熱水・土壌消毒を行うことも有効とされており、カボチャ・台木が黒点根腐病に耐病性があるという報告もある。

写真提供：岩手県農業研究センター